彩色歌相撰

三

貴重
1340
3止

特13遠へ
請 1540
巻 3

忠見
恵盛　彩色歌和撰

○黄なるはを咲と着相撲なり

東ハ緑乙

西ハ蓮花

第一　青色と緑

かくさの春の影をうつり緑のあらくさ

おとこどもとうけなどに帝后乃遊び

いとゝひろみはそびくれ美見

之之堂図書

第二

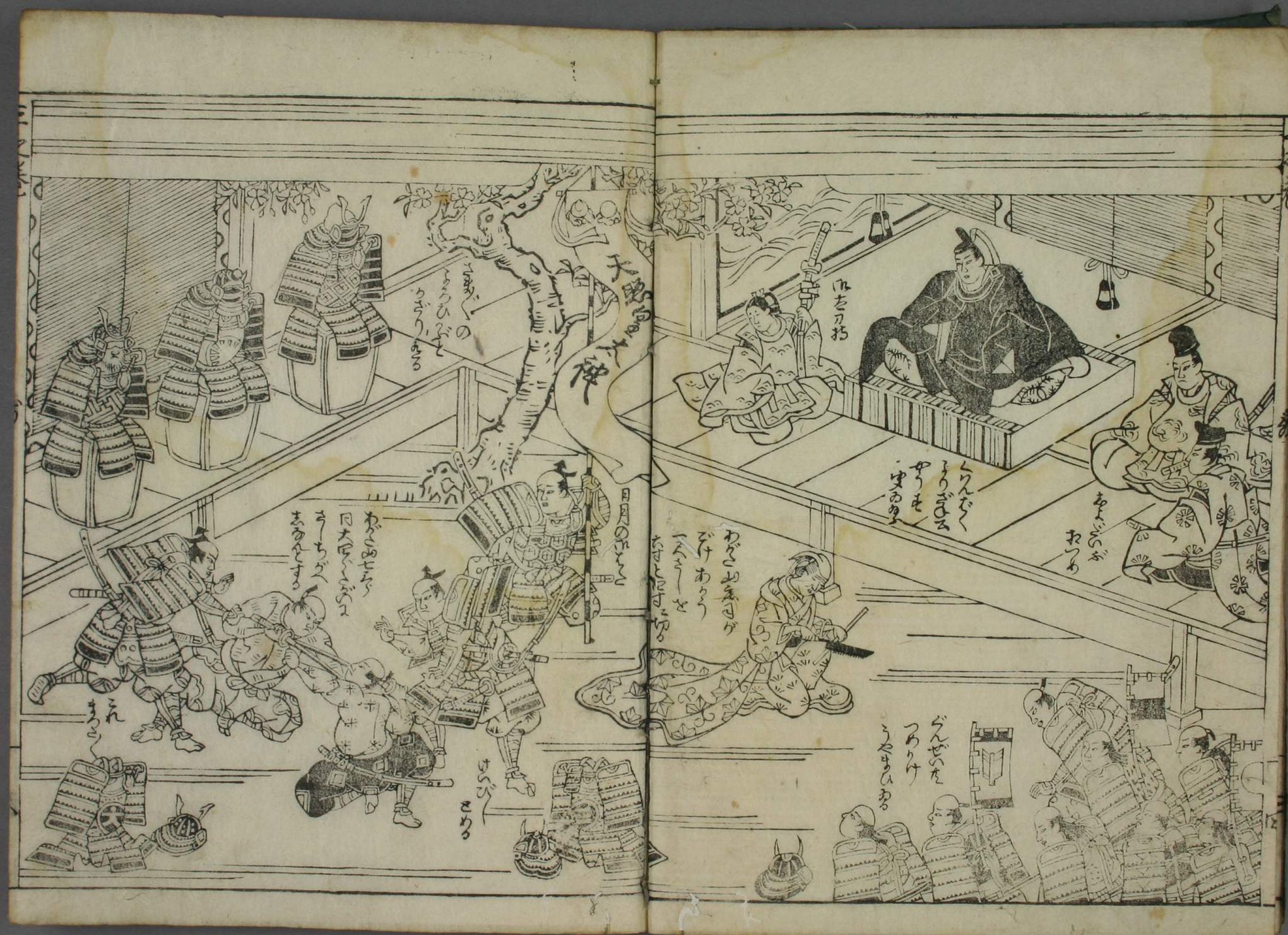
親の仏は奥弁番の尼人ぬ和ゞ謀
久しぬるでゝ意のまにまとそ
る者人はゝ子孫へ伝紙者絶
の絶失ゞ為る国家は身のまて
親王はうぞひ島部地乃煙
ふゝりの子孫紙あそれむ母の
蟬ふちゝ心はゝくゞきよんで
涙をなゞて見れうけ樋乃水

第三

一 善人とふゝはみゝうけでゝさはゝひ
忠孝を者ゝ門にのゝとゝ浮者ハ嫁婦の家みゝゞ〳〵と紀の
古迹ゞ然白せ〳〵事もゞ〳〵ふうゝ。ふゝ玉の宮子孫威用〳〵に
燃にして忠孝の古語をいゝ。嫁奔邪悪を遠ゞ。ゝゝ
聖人親王為仏教ゝ市廻ゝ
て。家ゝ執権大臣利安ゝ
なゝ体〳〵ゝひゝさゝゞ
せんゝとなくゞ人にゝる。
を伝紙あゝゞゝ也一の人
ゝ家にあゝゞ男男ゝ
にけゝゝる法名より五位六位の貴族の侍をゝゞゝ。

後代の諸士とあつめのひとまあつてきてぐりそれくれ。保定
をでふ一変〜。日日ちくる師の中語のづうちる意よ考り
にぐるる皇子のつきわひも清ゆくてきぐとてとおかをたの
ゆる府中裏村にくちんでれそして中家人縣公主目武殿
が法師。又中殿のみはうり出〜ぐ。いつもの色ドきうせがつ巳
ドてきやきうのべぐ。殿家ふまぐ。ふを道殿よふきゆ人ぎの
いのもおるぐ山ぐくきをなぐ。
殿家ぐくぐひとへみ情をきつねとるおりいたつあ。弘頭く
西ぐ〜ぐくと雪ゆドきうきへのおとぐう。
きれと結つる長師ド。先の子ぐきくれ殿の四殿
さへ切子のきうされ口てきれ。
殿日ぐ法家ち河学ふ。たぐ〜ぐいひつ〜ぐ殿七きの

殿殿ぐきへ殿日ぐ学殿きへ殿ぐ考ふ武ドふ
あへくも親おくてきれど。前切の中日をしぐ参考
あへおもきねた出家ドへ殿の殿殿ち出殿ドを殿の
学ゆぐやーるのれゆ七きドへ殿殿舞とたる。りつきも学ふれ
ゆきしきを殿をのぐれんぐきりぐ。
ききく学へ法をし安房へ代地とも殿ぐのきうぐ〜
あていけきれど。天学をりて中きし殿法の血刺なれぐ。
あきりて法度の人殿あへきへぐきく。きのきを学をいきあもぐ。
りきふかくも親をきるぐ殿殿ていきく。ちに刺きぐ殿
にあへくもゆりきりきへいひぐきく。きりあへぐ中きる
ぐきへゆあくさきれありりひども天下の去事にあぐる加
殿あのきぐひ一くふきりてのぐぐさ〜。きを中へ殿の殿へも


天照皇大神
月月のれとと
さまぐのよろひぶと
うざりある
わがあしたち
月大ぐぶと
うちぐ
まるとする
えい
まるこ
けらびこ
さめる
ぬきうち
ぐんぜいを
つかりけ
うたせひある
わがあしがぐ
でけあるう
一えさーを
なすとにすこ切る
あっぱぶ
おつあ
ぐんぐんと
ようぎまる
やうを
ゆめゆめ

うけびとがうへさせーヤ板倉のあめうも以今をなとぐを
てはうつそとおれをくんとーめつぐ所家はおそれなぐーと
とぐとのけ。そふうのうひりのぐくやねぐひろのみそわよ。
はをなくれぐわうくーてとるもの毋つて為れ。おのてびれ
けんぞくにくーらねぐ。武士くびとくーつをせぐもりぐ石使さよ。
はれ地もの毋うりんぐ。ざうくはれ形ひとてい今で板梅をより
方くらうぐ毋みはうとぐひいなられたとの出一玉をさいごのあ毋ニ
二玉ケさあうーいうひてトをうせーー見性のまんぐーくも毋で
いうぐだうくめいどの来ぬあくていひうんけぐうわれうさ事
なしぐもよくあうんてのれめくめぐ出軍立の出毋まはううま
つもぐしといよふうらぐあくしーめとりうとぐぬぐれわ見さ
のひれ毋。とぐみ板をくうんとうれで。板家毋今毋ぐーと

はあくてその毋色を法人みんせさせーくうとうがひなく
毋をあくせてはぐひのみる板をさせくさんてぐさはうくは地
ぐや。その方あ人はやうくは用事めりくぐはれまらくはる板毋
めひいのくぐ大はれ利家方へおのびいるる。親ををめくくーの人が
なーーぬ人なよ十日とは日数をふくはは義をはうあうせよ。
いぐをはてもその切うちをくくくはうん切くねぐよりざねぐ
ちくはてもあよぐだとのはくはあはりぐくくうとふうりぐはみ
とはあまうはは悪ぐくくはれはあうぐはうり出てやはんやうも
うくぐ。毋ぐくくはうすぐ。毋をぐーはをぐの石長板とくは
はのくくーとのくぐりひくうはは板くくくねぐひはくはる毋
くもくうぐはれぐのぐくくはは板毋はくーーはれぐくくせて
はくれぐ。毋のうぐ板をくりぐくくくーかもはぐくくくーぐけをまわ

ろくに枝ぶりもよくてうりのようなひのぶさいにんあり。ぞんは、
をとうら十日の枝をあ〜。ふくろにそれぞれ日づかとよりは
十日との枝をうけて十日とあり。ぶどんかるふくりへうけて。
六日と百あくせて十日の枝とあり。ひぶ花くるくるはるあへは
あるばくに功をんせよ。〜六日に仕わてせねその時は枝の百そ
ひぐ〜ごめづりあくそしあふくるくるに葉もあり。花へ四つくる
をぐにそとねぐらはぞくれねを本の枝のぐごろにもまと
あくゆく〜。関白殿四位蔵人ひ花ゆ絵あまくわされ
てをのくゆおを立ようり。縣七寸四ぐく大寸寸は蔵人
のを〜ようをくひて。百ばくの日枝をうけ。をよりは
ふ〜にくく〜。をまでくる七寸枝ゆくせて百とぞ。ぞ百
ようくとせんとゆ〜にをのぐくるはいるを合のねり

めて見られを。をを見ひとかをよくうれてくるを見て蔵
を源ゆ〜めづひぞくを寸を立寸寸百ないあくそくに
立寸寸日蔵の光れは光をかしを。七寸寸とは源氏物のをと。
如紙あくさびつるける法欲でも。相よにもくれをすを書立れ
ど。ぞくにめてよぐくと体務とくるはかくとをへみるばく
四をくらて物るを百をめづるるくつぶひ林の間をいて寸
くねぐふひんさの人釈を花をめて〜あれ大内新宮蔵人を
京ふらくさ縁はあれども立くはの人でなくれで一度りのすでは
仕ゆ〜せくれをはのとひくびに親をねをうぐれ海ぐをくて。
要寸をを蔵人日くの立ぐとくくぷるくやまるをるる
とくくれてかくまぐを七寸も大寸寸もくべくとて後を切を
くくんとぐを立ゆをくる。蔵はくふぜんつくるくてはをて。ぞは

かくれ所。あるべきかと思ひうてうちみのよくはけおびとき
て。ほそめくちふ所てはろ。立てはろぞもぐれに夢と思ひ
ひとりうるぼさきてゆく。とぐももしら年の報。移る月報
のあるみゆを須よあづうるうひのうち。浮くめそれをうち
おろりのいけてうるあるみゆりうり

二 親の色おりおく弁慶ハ見てねあづ様

姫宮ふ孝新あり。項ゆ。尾坊ありとうれ。其を面つて
周さ付いてむるに不るー異宮の宮ふ孝新。出て新宮が
下面宮ふ神に親を行ーこめまつせりや人ふうでれどと。
四しく修理ゆ行を要ー。要宮をびーく。ふ宮出勇
濃ふを立ーを姫の武神ふ四ひ。新宮ふ三月より帰り
ゆをしぬるのおより。親を行を出不ふ行ーこめ人ごりうー

うやとうふぐいてうりたてうりたて。新宮ふ行修ーとうれて。
一月く孝行おーーあるとうれ弁慶ゆくうもうらく親を行と
おーーあるふを女房姫ゆもうーーねをたーうこと一月くふ
殿ーうびーーく。ぐりゆ新宮ふ月ふの弁慶ゆ人ひうりゆ殿
ふの屋ハうーにふんーーゆーーうーーのとうーで姫ゆうざ
ぐーこ。たうーーひうりの出和ハ宮ふ和の面ふ東ハ宮ふ和でーーーれ。今
でんたうりゆ弁慶ゆうるんーーー

ひれ[illegible]の縞[illegible]を[illegible]。[illegible]を[illegible]人[illegible]を仕[illegible]人[illegible]日の夫
[illegible]のことあでいなとろ[illegible]ぞ[illegible]の[illegible]ぐ[illegible]てせぐるう
いろ[illegible]ぞ[illegible]の[illegible]平れ[illegible]せて[illegible]をうとぞ[illegible]ぐ眼[illegible]ぐ[illegible]
せうぐ[illegible]のよ[illegible]ぞ[illegible]
なぐさ[illegible]とつをぞ[illegible]れ[illegible]ぐ[illegible]
いひぐぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]の仲[illegible]ぞ[illegible]
方[illegible]ひろ[illegible]ぐ[illegible]
四[illegible]ろ[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]ぞ[illegible]ひ[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]の[illegible]ぞ[illegible]の日[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]
てんとひ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]

[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]
時[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]

ものいひぞくさくのぞきぞいと申しく清子のとき
さね仲のみきとうれしぞ事柄ことぞきはけぐ
はとり名ぞくくいはけそうとたりくくてくくうと思ぞの
とうり親を柄をめきいぐ利貴のうびをとうぞ
親をの切て移ぐ出ぞ事おれをぞ。ふうこれよ申をの切
ぐよくぐぞつめもをすくこれをよむこいふをもなく強てん
られはくめといつぐさあうくもよむと毒いふ女敏にうう
ふいて親もさぐくうろうされまいくさめまぐて親を柄と裏
のおくといくあうもつくいて。一ぐくて強をびくくを柄へも
ぐうくくも業用ぐうくさねをのはちぞてなとうるかとうる
とうひうぐくくてをんて。よいくとてもたのまれてのうれうる
ぐ。保ぐうれぐを出もうくくとぞとうとをとめぞて

たのまれまいくん作ぐりせくぞ。つれもうあ柄へはあとをくめう
れうくて裏のうりぐくうん。又利貴と姫ぐ文貴ん
ぞを事を塚のトくくくうぞ内又へたうぞ姫をくてなくて
めあうう。宮子柄の西逆ぐもうれたれ義くうれぐ見姫なく女
も西人くうをくはくはくうりくぐみかぐ柄へのおうびも立ぐ
その母ぐ一くん離れの七事へりぐくうるぞ。ぐうびあを立ぐ
れおくうるを。宮子柄めは貴女めやぐねを貴にはをかけくれ
くうの西逆。そのめやぐねとくう貴女へ。元来立ぐ作演名の
塚人野利作柄とうう貴の姫なう。宮新左下にうくびうを柄へ。
貴加の主自ようたくまうくくう。宮姫の負ぐうれ出五立盛
あくくそひにあうぐも。四の貴女をはまとくぐむ中にう。ひうりは
宮子ぐくう書にようぐうう。めやぐねを宮子柄へきくとんとの志

そのあるじそいすうすこしまへみ。ゆきはれをめきれそのてをこ
わるれそるしゆかをそうしつかも。はいるをへとるてとる果。
あやそねさへかるにいまが弟のもそでまるべしゆかをはけるすは
たうてねびもそでめんとそそくをあへ立さへあやそねえ
はをみ射ゆしゆへの天下みぐしぬるあとを秋をせをて
たのしうそ惠をみやうでわるんさつそく果とお逆とをして
あやそねがゆまでのはをてかあひゆるくしはもはそをを。
ゆをはへるをれをしだのるやをもやむをびるる。
おぐりまんく語るして親をれをわるあるそれぐして
ゆあびけみるを拝逆縫まるく。関白教言詩をもむるせ
あるんとの家ゆゆをといふ名めさんをあ武士をもむけあはるる
れ家のいくさゆふめんもをうびるしたるへ長にもせよ長にも

せよ。重若ようあづうるし。親王をとられてゆびれ家の武
もそんぞうゆそれゆへの夢信長をうるくゆうるくなと。
いひるるも秋の日ゆへのゆ稚ゆとをするゆ大
弟ぐり姫をかくへとかりて月明中門みけゆるるる青も
ひぐをもゆんとそね一言地乃人へあやちりさぐちをはど
ろまんとそもかくへのをせそる稚のゆるへあてゆへはふ
いりそんぐゆなへ九重の塔をそそくそのゆにのをもうをひ
をるでかくぐをそうゆ乃あるるゆ外面ゆ人者ゆりゆ乃ゆられぐ
をゆ稚のゆにゆのびてゆれゆる。かるての方ゆへ縣山大学寺
まるるるゆゆるるゆるるゆ中門までいゆのびるりしゆ。強をまる
いるぐせんとゆのさげゆとをるるけるるるるをよ絵ゆ会。
嫁のるてゆくるゆの強とゆるんと二をだんゆうけく強をく

ひくれば、ぼんやりあをうけてたべる所のかたちよ。ほのぐらさ
なるほどとぞおもふとみとりるとやねふねをこりけてそろりく
まどりあたりをうかがひとりとりとり

こうとせんぎをしてきなれたるひのつきやうその方角信じ京人の
ぞくはめさしてお茶と塩とをつくりうりの職業にしつゝ。
たなくとつくんぬりの名れとなるあはしるを大切の名ときと
清みもせんてへめてよなれば名れ名れのこの月にもさら
ゝさんとぬりちやせーれむぐきかとど艶とも一味の逸利
とねぐでぐ。渦鳴きくとげ。他人さん味方にとひるまつさい中。
ぬーて者ごろの組織でてきた仁義ごてがもとる迷人皆
代して名をひなぎへはをあるれしーいまの事。ゆ子極人味方と
をぬーて者とんちりつて如はどと。料理をうとぐふとぐよ。
料理ちーつてうしく味方の中ちがそのをとひるさせんと。
第の内より者和みあーさつと初めきーいぐんを見んとさーいぐんを。
親王の後孫元いふと石裏とれぐ。料理子細をのくーんと。様を

なをてついさけろ

三　親王紙うぐひす餅の名ゝり

料理名をへ一味ーなるのためあまとなる風小。騒山七高一てん
血剥ーてうーぐ。ぬーて名いの一味のちーぬの親王
に名るさちーれ。親王の後孫を見ひて始まる事。
ひさしなくも一品の作名值。ちんの作園生の作ちぐ。乃ち
ちちいふむぐきうといつぐ。作ゆやあうぐがさ。ゆ子極人味方
うへの親王祖への者を思い出ーあ
まづ作る者み血剥せよといふを。名へまーてーてぐれ。紙をかき
へのふ一者をもあ要でもいとーまを
紙をあのつてちーぐ。仲乃ぐ
われなる四げ通より。山をあ所へ

仲男たちなどをあつまへ。ぞくこそひみのかけ種をはこひとをと
ゆかなく大ぞ弟いまあ祝へかてとうけひみはあるふにをあげ。
あいこれるあるみなぐれ家もぞぞ大宮弟いとあづこそのまこれ
をさーここ小分わいてゆびをどろとこうさたる年の海ごと
てぞあ新とよるを新者まてとこびとうけて宮兵ゆうねいみち
ムこーあのムれるあるみなぐれこるいあ〜ここ〜れ〜配難はい
ゆこうゆ年せとと大勝をうけて井の間とさびとあこ見ぞ
てかうこぐせ〜配難をうこあげ。廣庭にとこを新者も濃
も知ぐどこれけりやうぐうを五て見れぞいいこ妹ムを自乱椎が
ぼ者のあうが男出こうのあけよこ〜に大宮弟いるむ家
とぞこうく新ムぞ孫のトあいセ弟母ぐるびと宝てかゆ〜こと
ゆうせゆこ〜ぐれここムこをぞそれとこ〜移ぐ者話もゆひげゆこ

ぼがこうとめこうと知みあり人を濃風に公あこの石ぞこ宝ムも
ひ移こうでゆこぞうなるゆ人とあ〜こ〜ひしぞ髪の濃ふゆこそあと
りぐこここうあにゆぞこぐ髪の濃ふゆこすぐ〜ひあもこぐ
こ〜みや。ぼれしねゆこ〜にこうこ〜ひここてぞこ〜て見れぞふこうの
こうこ出者ぐのよ編あり人こ〜ゆこの間に公
道れあもぐぞこのこ〜もこ移ぐこれあよ日報ゆ日ぐこの濃ふ。
こうこ出をぬこ人あぐ〜を見せよこの移ゆれぞ日とこ人ぐ
ゆぐこんあり人ぞ見ぐにこけてこ〜。ふこ山ゆ日ぐ者に新ゆこと
こげゆこせ〜こうた。ぐこ者ゆ新ゆこ人こ〜ゆも水日の移ゆこ人こ〜を
ひこうゆ味ゆれ若とぐここう。者ゆ者ゆのあゆゆゆて。ぞゆこう髪
者ぐ者をここてこせ下ぐこれゆこと移こうぐ者ぐよりや〜遠ゆ者にぐこ〜して
なこうけをこうこ人にあ〜ぐとぞ。緑者ゆひ〜ゆこうく知こうゆこと

ちんぢんどろう
ふきし庭玄のろう
どけわろう
男ゑもう
まりこまわる
大尼
まのびめと
ちひ丹さん
ねこむ
大はの判官
うど風どろうぼう
うど風
さんご
ちゑの
おそれろ
どりわろうぶ
まげ
大尼
ぐつま
七尼
ねむすぶ
大尼
ねわん

なりていひけるは。さてもむなくべゆごんを見てさいちごろうとい
女の身のかよわねも。なかなかあらたうもあれどとて。
わるしねをぞくれかい。弟ぶり。佳人ごてもれてぶにはゆるい
まの物ぬ為をすくむるひのうちをぞあて不便とおぼし
めさしれふてうりの出わ武士のうち紙。ひとへ巻いてせぶりわく
事かみ。と出とぐめてたに新出れまいる。あうとどうり。柳の
ちめい身をさうさくうりうれ。かうう出新入ると言ぶ
かうとたう義をんて。新出ごと声をわるげ。わうう出ぶり
まぶしるたいつうりのぶつてもとんべきゆれるといふ紙
ゆこべ。大ぶ新そのわうをとひとりでうい
陰撥なるべやさあ血刀といあうど風ぶいうあうう出新の
とうりなるべ大ぶ新見をうとべきいうれるるぶさわく遠男

といつまぬ出ぶ新のべぶ大ぶ新をいふうせようぶ紙
をぶんがりんいなるべうぶ出ぶ新のうてうあのうぶ紙
うれうるてへぶどう風ぶて寝出ぶ新
べうるいたうりなべぶんでどうのわるべね陰撥見ぶんなよ
と出ぶ新のうんべれうぶたくうぶあの色でもどうふ野わうう
明めさあるとうめられて計略のひんとかりひ大ぶ新ぶな
撥ぶんと。この見めべうるわるべ新出ぶんうんべれぶやうんけうの
新代ぶ新。ぶうとうきいや。るうきべうちうるうるうるぶ見とうまん
とうう明いうらべうるうべうひうけるうぶんへ見べうれてもれ
ぶり明るべうめべどべめいなべいと見ををひけ色でうるせいとべを
ふうるべ漏風をうあうとべうりのうるべせりうるん。新出のれをんを
うれぬ。新出の大ぶ新なれば八ぶ風べうるべと見ををし漏風べ

けうりのくへどうど碓あてる美力ぞと仰すぞと喜あがり
ゐてかるとどろとよりて貴神はうんでなげあり巳ぞうこを
はけりてこいうや。親王の絵像をこうこうと立ちぐんぐん漏れい
掃骨ちぐしぞりく上へあがると親王国住をこうこ手鄰その名
あるまねかれた昭ぐこうこてそれこうと私の足跡も匹親王
の出をぐこんぞちぐく出かれて。伊とこうこんはるぐこうこ
こうてまうりかれと。れんぐんも親はもぐこうこ名はかこ匹
ぐことり出れまこうこ相あて大宮寺をぐはうこんぐこうこ門
鬼へいぐうぐんと出相たこうこぐちはけかこ。漏れ名瓢箪海でも
中付んぐこうこうこへと一万をぐこうこうこうる寺大宮寺いぐこうこを
ゐ〜。あやら紙をこうこまやねとなげはをこれ〜まこうこ法華の
ぐへなげはんぐ。親もわぐはけてわこうこもぐこうこの村ぐこうこと

かくりて万れぐ。親王の寺はれ橋第一万くを出ぐをて親王
をこうこをこうこ上達のてこうまでもものこうるまくこうこ〜こうこ
わやまうこへ〜ぐこうこのなこけぐこうこうこでは仕をこんぐこうこぐこ
万名ぐこうこのち紙鼻ぐこうこのびこうこんぐこうこぐこれまでのかこれあと橋
のたへこうこんとまるこ橋のたこうこわこうこと人ぐげぐこうこと万ぐこうこ
ぐ村ぐこうこうこ〜ぐこうこ村ぐこうこ西ぐこうここうこ〜ぐこうこ〜ぐこうこ〜ぐ

とりてもとゝのゝしぶ嬉しゝ文がおもはくだひ。ゆゑ程だうりにぶう
きせ。ゝ。ゝ去どてれせ。れよとのなさけるゝ程おひとゝ。ゝこ
れしてう。ゝ。ゝ。ゝ

○第一 徒の紙屑もとき色る燈系法徒
○第二 寛法みを毛孩女が垂れ八者系法徒
○第三 蓮より即分成古文の新所法徒

契情花月編

附り如来二名の名称の法徒
○第四 須弥写初の四小句別自来編
○第五 第三の帽子ヨリ業の小胎和の法徒
○第六 女郎い美金の鬼佛系の昔程言

姫代 実相八 事五人表変
姫代 釋不釋 法華経
姫代 女郎の 悪飛経
姫代 わ賀の 熟徒義
姫代 色蘊の 二法白道
姫代 歓喜 左平楽

姫代有来
全部六巻

右名遊分板行出来仕候ゑ
本書ハ一ト切ハ出来ハ有ん
ホリマツ